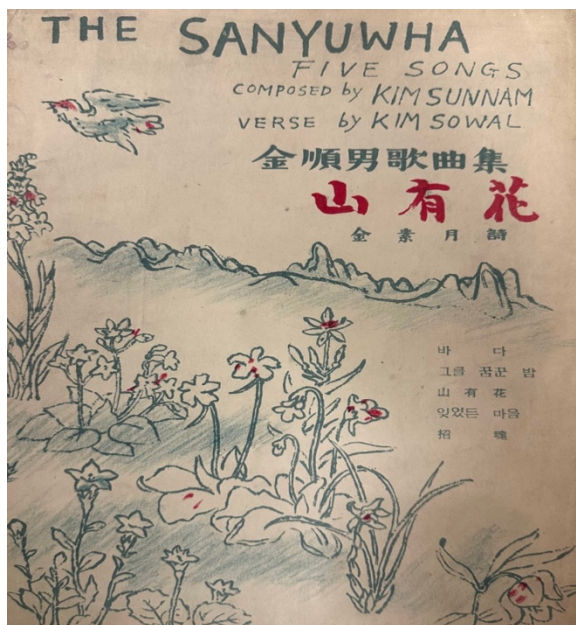


## レクチャーコンサート ファゴットが奏でる韓国の声

### —歌曲(Gagok)にみる近現代韓国の音楽と感情—



20 世紀の韓国において、作曲家たちは西洋音楽の調性・和声・形式を受容しつつ、韓国語の韻律や詩的表現、そして固有の感情や世界観を融合させることで、新たな音楽ジャンルである「歌曲 (Gagok)」を創出した。このジャンルは単なる芸術歌曲にとどまらず、近代化、植民地経験、戦争、分断といった歴史的変動のなかで形成された個人の感情や社会的記憶を表現する重要な文化媒体として機能してきた。本レクチャー・コンサートでは、ファゴットの豊かな音色にのせて、金順男、洪蘭坡、李建雨、金順愛の歌曲を取り上げる。各作品を原典 (urtext) の背景とともに紹介しながら、これらの作曲家たちが西洋音楽のリズム・和声・旋律の形式を、韓国の文学的・詩的テクストとどのように響き合わせているのかを、演奏

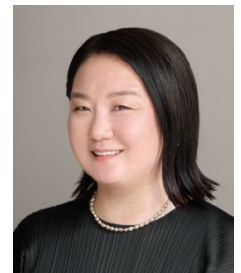
とともに体感していただく。演奏と解説を行き来しながら、音楽作品を単に「聴く」対象としてではなく、言葉と響きが織りなす表現として味わう機会としたい。あわせて、楽曲に込められた感情の動きや語りの広がりにも触れながら、音楽を通して近現代韓国に生きた人々の経験や記憶、そして現代へとつながる歩みの一端を感じていただくことを目指す。

演奏者：黄允姝 (University of Central Florida 准教授)

司 会：金志善 (龍谷大学准教授・東京大学特任准教授)

#### ■ 演奏者紹介

黄允姝 (Hwang Yoon Joo) は、セントラルフロリダ大学音楽学准教授。分野横断的かつジャンルを横断するアプローチを特徴とする世界的なファゴット奏者であり、近代韓国の音楽史をアーカイブ資料に基づいて研究する学者でもある。植民地期および冷戦期における韓国の西洋芸術音楽に関する研究は、『Korean Studies』などに掲載されている。これまでにカーネギーホール、カリフォルニア大学バークレー校、東京大学、上海オーケストラ・アカデミーなどで講演および演奏を行っている。また、ジョージ・ワシントン大学の北朝鮮プログラムを修了し、ハーバード大学韓国研究所にて客員研究員を務めた。



## ■ 楽器紹介

ファゴット (Bassoon) は、木管楽器の中でも低音域を担う楽器であり、深く温かみのある音色を特徴とする。その響きは、ときに人の声のように感じられ、語りかけるような表現を可能にする。本公演では、このファゴットの音色を通して、韓国歌曲に込められた言葉や感情、そして時代の記憶を、より豊かに味わっていただく。

## ■ 演奏曲目・解説

### 1. 洪蘭坡 (1898–1941) 「愛 (사랑)」 (1933 年)

洪蘭坡の《愛 (Sarang)》は、1933 年に刊行された『朝鮮歌曲集』に収録された作品であり、近代韓国の時調詩人・李殷相 (1903–1982) との協働によって生み出された。洪蘭坡のキリスト教的背景、アメリカ人宣教師を通じた西洋音楽の受容、さらに日本・アメリカを含む環太平洋的な教育経験は、この作品の形成に大きな影響を与えている。とりわけ、「愛」という近代的主題を選択した点には、1930 年代における新しい音楽表現を模索しようとした洪蘭坡の作曲家としての志向が色濃く反映されている。

### 2. 蔡東鮮 (1901–1953) 「故郷 (고향)」 (1933 年)

蔡東鮮の《故郷 (Gohyang)》は、近代韓国の詩人・鄭芝溶 (1902–1950) の詩を通して、故郷への郷愁を描き出した作品である。蔡東鮮が生きた時代的背景、植民地下を生きた朝鮮人としての歴史的経験、そして鄭芝溶の詩への感情的共鳴が重なり合うことで、深い韓国的感性が表現されている。鄭芝溶の詩世界を思い描きながら、蔡東鮮の西洋的な調性による音楽に耳を傾けると、その感情はより鮮明に刻み込まれる。作品には、失われた故郷への個人的な憧憬が込められており、時代や空間を超えて響く郷愁を感じさせる。

### 3. 金順男 (1917–1983) 「子守歌」 (1948 年)

近代作曲家・金順男による《子守歌 (Lullaby)》は、1948 年、彼が北へ渡る以前の韓国滞在期に作曲された作品である。同年、ソウルで刊行された歌曲集『子守歌』に収録された。本作は、1945 年生まれの娘・金世媛のために書かれた作品として知られている。彼女は韓国に残り、その後父と再会することはなかった。この作品には、そうした極めて個人的な家族への思いが込められている一方で、一部の音楽研究者は、解放直後の混乱期を生きる韓国の人々に向けた「癒し」と「慰め」の音楽としても解釈している。激動する政治状況の中で生きる人々を静かに包み込む音楽として、この作品は今日まで深い余韻を残している。

### 4. 張一男 (1932–2006) 「碑木 (비목)」 (1969 年)

《碑木 (Bimok)》とは、朝鮮戦争 (1950–1953) で命を落とした無名兵士たちの墓標として立てられた木の十字架を意味する。この作品は戦後に作曲され、歌詞は韓明熙が非武装地帯 (DMZ) を巡察していた ROTC 将校時代の実体験をもとに書かれた。彼が巡察していた地域は、およそ 4 万人もの兵士が命を落とした激戦地であり、朝鮮戦争の悲惨さを今なお伝える空間であった。韓明熙はそこで、錆びついた軍用ヘルメットや、苔むした無名兵士の墓石を目にする。20 代の若さで命を落とした兵士たちへの追悼の思いから、この歌詞を書き上げた。作曲家・張一男は、その忘れがたい瞬間を西洋音楽の調性によって音楽的物語として表現した。

### 5. 李建雨 (1919–1994) 「椿 (동백꽃)」 (1967 年)

近代作曲家・李建雨は、冷戦と朝鮮半島分断の時代に大きく翻弄された人生を歩んだ。日本留学を経て混乱期の朝鮮へ帰国した後、彼は自身の政治的信念から北へ渡った。その後、「越北作曲家」として韓国社会から忘れ去られ、彼の音楽もまた長らく顧みられることはなかった。解放直後に韓国で出版された二冊の歌曲集も、韓国に残された家族とともに置き去りにされた。本作品《椿 (Camelia)》は、1957 年に北朝鮮で作曲されたものであり、歌詞は越北詩人・朴世永による。そこには、韓国に残してきた家族への思慕と郷愁が込

められており、分断された北側で書かれた作品でありながら、深い韓国的感性を宿している。ソウルの「韓国歌曲研究所」は、李建雨の歌曲を再評価し保存するため、2020年に彼の歌曲作品の復元を行った。本作品もその一つである。

【日 時】 2026年6月12日（金）13:15～14:45

【場 所】 東京大学駒場キャンパス駒場コミュニケーション・プラザ「舞台芸術実習室」

【申請方法】 参加費無料（定員40名）、ただし 6月10日（水）までに参加登録が必要です。

事前参加登録は こちらから → <https://forms.gle/u7N1bjSYsXsB3tR18>



※ 参加は、定員になり次第、申し込みを締め切らせていただきます。

※ お問い合わせ [cks@iags-cks.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:cks@iags-cks.c.u-tokyo.ac.jp)（東京大学韓国学研究センター事務局）

主催 東京大学韓国学研究センター

後援 韓国国外所在文化遺産財団